様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４６３４８９

研究課題名（和文）在宅要介護高齢者の排泄障害の介入時期に基づいた援助プログラムの有効性

研究課題名（英文）Efficacy of Assistance Program for Elderly People Requiring Long-Term Care Based on Urinary Disturbance

研究代表者
田中　久美子（Tanaka, Kumiko）

愛媛大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：００３４２２９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：尿失禁を有する在宅要介護高齢者がおむつを使用しはじめた以降、家族介護者の排泄介助に関する困難感は9つに分類された。家族介護者は、「夜間の尿漏れ」「失禁の後始末」「トイレ回数の多さ」に困難を感じており、これらは高齢者の排尿状態に起因すると考えられた。また、「自分流の見様見真似で試行錯誤」「介助時の身体的負担」などにも困難を感じており、介護者の知識不足に起因するものと推察された。看護職は、高齢者の排尿状態と家族介護者の知識や技術をアセスメントしたうえで適切な介助方法を指導することが重要であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The feelings of difficulty of family caregivers concerning excretion assistance for an elderly person requiring long-term care and experiencing incontinence after they started using diapers were classified into nine categories. The family caregivers considered urinary disturbance during the nighttime, cleaning after incontinence, and a high number of bathroom visits as difficulties, which were believed to originate from the elderly person's urination status. Furthermore, the family caregivers also experienced their own trial and errors by imitating others and the physical burden when giving assistance, which were believed to originate from the caregivers' lack of knowledge. Instructions by nurses on proper assistance methods after assessing the urination status of the elderly patient and family caregivers' knowledge and skills are believed to be important.

研究分野：看護学

キーワード：家族介護者　尿失禁　排尿介助　困難感　在宅要介護高齢者

１．研究開始当初の背景

高齢者は、加齢に加え疾病や障害により心身機能が低下することによって、獲得した生活行動を失い日常生活に介護が必要になりやすい。高齢者の排尿障害の発生率は高く、中でも尿失禁を有する高齢者の割合は高い[1,2]。加えて、尿失禁の対処はおむつに頼っている現状も指摘されている[3]。研究者らが実施した調査[4]においても尿失禁を有する在宅要介護高齢者は約 6 割であった。さらに、在宅でおむつを使用しはじめた者が約 6 割で、おむつ使用の理由で最も多かったのは、高齢者本人の移動能力が低下しトイレに間に合わなくなり失禁するようになったためであった。高齢者の動作能力が低下することは、機能性尿失禁の原因となるだけではなく、移乗や移動に伴う介護負担を増大させ、家族介護者の介助を困難にすると考える。

現在、国は高齢者の尊厳や生活の質などの観点から、介護が必要になった状態においても高齢者の在宅療養を推進している。在宅要介護高齢者の介護は、同居する家族に委ねられている現状にある。本研究テーマである排尿は、1 日に数回くり返される行為であるうえ、動作の介助、汚物の処理と身体的にも精神的にも負担が大きい。先行研究においても、排泄介助は介護負担が大きい介助の一つであることが示されている[5]。排泄介助が主に家族にゆだねられる状況にある在宅では、家族介護者が排尿を介助する過程において、どのようなことに困難を感じているのかを明らかにすることは重要であると考える。しかし、尿失禁を有する在宅要介護高齢者を自宅で介護する家族を対象とした研究[6]は少ない。研究者ら[7]も、尿失禁を有する在宅要介護高齢者の排尿方法は、高齢者の移動動作の自立度が高い者、介護者が高齢者をトイレに行かせたいと思う者がトイレを使用して排尿していることを明らかにしたが、家族介護者が排尿を介助するとき、どのようなことに困難を感じているのかを明らかにするには至らなかった。そこで今回、在宅要介護高齢者に尿失禁が出現した頃からおむつを使用しはじめた時期、およびおむつを使用し始めた以降に焦点を当て、家族介護者が排尿介助時、どのようなことに困難を感じたのかについて明らかにしたいと考えた。

尿失禁を有する在宅要介護高齢者の排尿を介助する過程における家族介護者の困難感を明らかにすることによって、家族介護者が必要としている時期に、専門職がどのように支援できるのかを検討することができると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、尿失禁を有する在宅要介護高齢者がおむつを利用し始めた後に、家族介護者が排尿介助時に感じる困難を明らかにすることである。さらに、尿失禁を有する在宅要介護高齢者を介護する家族が、高齢者に尿失禁が出現した頃から、おむつ使用に至るまでの過程における排尿介助時の困難感と工夫を事例により検討する。

３．研究の方法

(1) 家族介護者の排尿介助における困難感

【時期：在宅要介護高齢者がおむつを利用し始めた以降】

対象は、A 県内で介護保険制度を利用し、尿失禁を有する 65 歳以上の在宅要介護高齢者と介護する家族介護者(101 組)。高齢者は、介助があっても座位姿勢が不可能でベッド上で排泄を余儀なくされるものは除外した。調査期間は、平成 24 年 9 月～平成 26 年 12 月。方法は、調査協力の同意が得られた介護保険制度の各事業所に対象者の選定を依頼し、各事業所から対象者に調査の趣旨、および方法を説明してもらい、調査の同意が得られた対象者宅を訪問した。訪問した際は、書面にて同意を得たうえで、面接聞き取り調査を実施した。内容は、対象者の属性、排尿状態、排尿介助に関する困難感の有無とその内容とした。分析は、①介護者から語られた「困難感」について、文章のまとまりが一内容になるように記述を区切り、一記録単位とした。②記録単位の内容を類似性により分類し、分類名をつけた。

(2)事例検討

【時期：在宅要介護高齢者に尿失禁が出現した時期からおむつ使用に至るまでの過程と家族介護者の困難感と工夫】

対象は、A 県内で尿失禁を有する 65 歳以上の在宅要介護高齢者を介護したことのある家族介護者。インタビューは、平成 29 年 4 月に 1 回行い、時間は 41 分であった。方法は、最初に調査協力の同意が得られた居宅介護支援事業所に対象者の選定を依頼し、事業所から対象者に調査の趣旨、および方法を説明してもらい、同意を得てもらった。次に、対象者が希望する日時に、研究者が事業所に出向き、事業内の個室でインタビューを実施した。録音は対象者の同意を得たうえで行った。倫理的配慮については、インタビューの前に研究者が説明し、書面にて同意を得た。内容は、家族介護者、および要介護高齢者の属性、要介護高齢者に尿失禁が出現して、おむつを使用するようになるまでの経過と排尿介助における家族介護者の困難感と工夫について、自由に語ってもらった。

分析は、①対象者から語られ録音した内容の逐語録を作成し、要介護高齢者がおむつを利用するまでの経過が語られている部分と、家族介護者の排尿介助に関する困難感と工夫が語られている部分を意味内容が理解できる程度の長さで抽出し、対象者の言葉をできるだけ用いて短文化した。②時間経過に沿って整理し検討した。

４．研究成果

(1) 家族介護者の排尿介助における困難感

【時期：在宅要介護高齢者がおむつを利用し始めた以降】

在宅要介護高齢者の排尿介助時に困難感を有する家族介護者は 51 名(50.5%)であった。高齢者の平均年齢は、84.3(±7.7)、性別は男性 32 名(62.7%)女性 19 名(37.3%)で、要介護度は、要介護 3 が最も多く 18 名((35.3%)、次いで要介護 5 が 14 名(27.5%)であった。排尿方法は、おむつのみが 15 名(29.4%)、トイレのみ[注 1)]が 1 名(2.0%)、おむつとトイレの併用が 35 名(68.6%)であった。家族介護者の平均年齢は 71.6 歳(±10.0)、男性 9 名(17.6%)、女性 42 名(82.4%)であった。続柄は妻が最も多く 28 名(54.9%)、続いて娘が 11 名(21.6%)であた。排尿介助時の家族介護者の困難感は、80 記録単位が抽出され、検討しながらまとめた結果、9 つに分類された(表 1)。

注 1)おむつを着けても、療養者本人がおむつを嫌がり外してトイレで排泄することを繰り返していた。

表 1　排尿介助における家族介護者の困難感

分類名	記録単位（抜粋）	総数
夜間の尿漏れ	・夜間、寝ている間の尿漏れに困っている ・時々、夜に寝具まで濡らす失禁をする	9
失禁の後始末	・尿がおむつからでて服や布団を濡らしてしまうことが一番困る。 ・トイレに間に合わず、漏らしてしまい、その後片付けをするのが大変	9
トイレ回数の多さ	・尿の回数が多いのが困る ・夜間のトイレ回数が多いのが苦痛	2
自分流の見様見まねで試行錯誤	・自宅に帰ってからヘルパーさんが行っていることに、見様見真似で覚えていた ・教えてもらい助かったことはなく自分で閑雅ながら調べながらやってきた	11
おむつ代による経済的な負担	・経済的なことに関して、おむつの助成があればいい、年金だけでは大変 ・おむつの価格が気になる	8
介助時の身体的負担	・移乗時に介護者の身体的負担が大きい ・中腰になるため腰に負担がかかる	10
おむつの種類や交換方法がわからない	・最初は紙おむつのはき方がわからなかった ・退院するときおむつ交換の仕方がわからずどうしようかと迷った	24
福祉用具に関する知識不足	・ベッドからトイレに行くとき滑り止めマットを敷くと滑らないこと等を教えてほしい	2
認知症による介助の困難さ	・母が認知症になり困っているときトイレに関する相談をすることができなかった	5

家族介護者は「夜間の尿漏れ」「失禁の後始末」「トイレ回数の多さ」に困難を感じており、これらは高齢者の排尿状態に起因するものと考えられた。また、「自分流の見様見まねで試行錯誤」「介助時の身体的負担」にも困難を感じており、介護者の知識や技術不足に起因するものと推察された。看護職は、在宅要介護高齢者の排尿状態と家族介護者の知識や技術をアセスメントしたうえで、必要な情報を提供し、適切な介助方法を家族とともに考えることが重要である。

(2)事例検討

【在宅要介護高齢者に尿失禁が出現した時期からおむつ使用に至るまでの過程と排尿介助に関する家族介護者の困難感と工夫】(表 2)

①事例

家族介護者の属性：A 氏　50 歳代　男性
　要介護高齢者との続柄：息子
　在宅での介護期間：約 4 年間
要介護高齢者の属性：80 歳代 女性 要介護 5
　認知症高齢者の日常生活自立度：Ⅲa
　既往歴：認知症

一人暮らしであったが、約 4 年前頃から認知症の症状が出現し、トイレに間に合わなくなり失禁するようになり A 氏と同居した。

表 2　尿失禁の出現からおむつ使用までの経過

尿失禁が出現してからおむつ使用までの経過	排尿介助の困難感や工夫
【尿失禁が出現した頃】 ・母が自分でトイレに行っていた ・起き上がるのに苦労して間に合わなかった ・ぎりぎりぐらいトイレに行けていたけれど少し失禁していた。	・困ったことはそんなになかった
【パットや紙おむつを使用し始めた頃】 ・ちょっと紙おむつにしみるくらいの失禁が続いた(約半年～1 年) ・パット(尿取り)は母が自分で買っていた ・尿失禁があると母が自分で紙おむつを履き替えていた ・母は、A 氏が知らないときにも紙おむつを履き替えていたのかもしれない	・外出前には、必ずトイレに行かせていた ・時々は、母に紙おむつを履かせるのを手伝った ・夜だけ紙おむつを履かせたりしていた ・失禁したときの安全のために紙おむつを履かせていた
【立位保持に介助が必要となった頃】 ・ポータブルトイレに座るまでに失禁した ・おむつのみで排尿するようになった	・母をポータブルトイレで排尿させるのは、片手で母を支え、片手で下着を上げるので大変でおむつだけにした ・おむつだけにしてもおむつ交換は腰が痛く疲れるのが一番困った

尿失禁が出現した頃、尿失禁への対処は要介護高齢者自身が行っており、家族介護者は困難を感じていなかった。一方で、外出時や夜間におむつを利用するなどの工夫をして日常生活を営んでいた。要介護高齢者に尿失禁が出現し始めた頃の専門職による支援は、高齢者と家族介護者の力を尊重することが重要である。しかし、立位保持が困難になった頃には、家族介護者は排尿介助の際の動作に困難を感じるようになっていた。専門職は、高齢者の日常生活動作を維持できるように支援するとともに、高齢者の些細な変化を見逃さず介入のタイミングを見極めて支援することが重要である。

〈引用文献〉

1)星旦二他、わが国の医療機関に入院ないし施設に入所している高齢者における尿失禁有症者数の推計、日本公衆衛生雑誌、42(7)、1995、482-490
2)星旦二他、わが国の在宅高齢者における尿失禁有病者数の推計、日本公衆衛生雑誌、41(9)、1994、910-919
3)吉川羊子、特集オムツ外しの問題　おむつ使用の実態、排尿障害プラクティス　18(3)、2010、9-16
4)田中久美子他、平成23年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号23593442)「在宅要介護高齢者の排泄機能と介護力のアセスメントに基づく援助方法」
5)日野由佳子、在宅アルツハイマー病患者の主介護者の介護負担感に影響を及ぼす要因介護状況と認知症重症度に焦点をあてて、高齢者のケアと行動科学、2006、36－44
6)井場ヒロ子他、在宅高齢者を介護する主介護者の介護負担感－排尿介助に焦点を当ててー、広島大学保健学ジャーナル、12(1)、2014、1-10
7)田中久美子他、尿失禁を有する在宅要介護高齢者の排尿手段に関連する要因、日本老年医学会雑誌、53(2)、2016、133-142

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0件）

〔学会発表〕（計　1件）

①<u>田中久美子</u>、竹田恵子、<u>陶山啓子</u>、<u>小岡亜希子</u>、<u>中村五月</u>、尿失禁を有する在宅要介護高齢者を介護する家族の困難感、日本老年看護学会第22回学術集会、2017年6月15日、名古屋市

〔図書〕（計　0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0件）

○取得状況（計　0件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　久美子（Tanaka, Kumiko）
愛媛大学・大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：00342296

(2)研究分担者

陶山　啓子（SUYAMA, Keiko）
愛媛大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：50214713

小岡　亜希子（KOOKA, Akiko）
愛媛大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：50444758

中村　五月(形上五月)(NAKAMURA,Satsuki)
聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・講師
研究者番号：40549317

辻　真美（TSUJI, Mami）
川崎医療短期大学・医療介護福祉科・准教授
研究者番号：00551251

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし